

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 杉本 文四郎

杉本文四郎氏の博士号請求論文「サミュエル・ベケットと未成熟性の問題」の公開審査は2021年5月14日にオンラインで開催された。主査は田尻、副査は武田将明准教授、秦邦生准教授（以上3名は本研究科言語情報科学専攻所属）、昭和女子大学の山本史郎教授、明治大学の井上善幸教授であった。

本論文は、20世紀を代表する小説家、劇作家サミュエル・ベケットにおける未成熟性という主題に着目したものである。世界的にベケット研究は産業と言われるほどの規模を持って久しいが、このテーマで書かれた書物は一つもなく、また論文もほとんどないので、主題選択においてきわめて独創的な論文だと評価できる。未成熟性は、ベケットが産まれる前に未発達なまま殺された内なる存在を常に感じ、それに対して創作上の義務を負っていたという事実にかんがみて、存在論的に重要な主題であり、本論文はそのような深いレベルからベケットの作品を解釈し直すことに成功している。四つの章は、ベケットの最初の小説『並には勝る女たちの夢』から戦後の『事の次第』までの四つの作品を一つずつ扱っているが、それぞれにおける作品の分析は丁寧であり、また全体としてベケットの美学の発展をたどることができるように巧みに構成されている。また、批評文献を最近のものに至るまで丹念に読み込んでいること、ゲーテの教養小説、ポーランドのゴンブローヴィチなど英語圏外部の文学にも目配りした視野の広さを持つこと、未成熟性にまつわる多様な問題を総合的、包括的に論じていること、なども審査委員から高い評価を得た。とりわけ、第4章の『事の次第』の読解で、個人の意識を越えた生物種としての人類そのものの退行という側面を照らし出した功績は独創的だと言える。

その一方で、第2章においてベケットとゴンブローヴィチがモダニズムの形式主義をパロディして批判しているという主張に対し、モダニズムの形式主義の意味内容があいまいであることが指摘され、第3章のサミュエル・ジョンソンとベケットがともにカント的「未成熟」への関心を共有していたという説に対しては、なぜベケットがジョンソンに惹かれたのかがそれだけでは説明できないことが指摘された。また、第4章の『事の次第』の語りの解釈に疑問が提起されたり、この作品中の数学的側面と啓蒙的理性の関係が無視されていることが批判されたりもした。

しかし、これらの問題点は、論文全体の独創性、質の高さを損なうものではないと認定され、最終的に満場一致で本論文に博士号を授与する価値があると判定された。よって本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。